

音楽の神様エルメート・パスコアルを訪ねて～その5

先日久しぶりにエルメートご夫妻よりメールをいただいた。来月で73歳をむかえるエルメートはすこぶる元気で、今年の1月にはウルグアイでのコンサートを成功させ、6月にはポルトガル、イタリアを中心にヨーロッパをご夫妻でツアーするという。奥様のアリーニ・モレーナとのセカンドアルバムも現在録音中ということで、二人にとって楽しみは尽きない。

今回はお二人との思い出の中から5つのエピソードを綴ってみたのでご覧いただけただけから幸いである。

ちなみに、以下にエルメートご夫妻の今回のヨーロッパツアーの日程を記すので（5月5日現在の予定）、6月にポルトガル、イタリアに出向かれる方にはぜひとも足を運んでいただきたい。

【2009年6月エルメート・パスコアル&アリーニ・モレーナポルトガル、イタリアツアー日程】

6月18日：Cine Teatro De Estarreja(Portugal)

6月19日：Centro de Arte de Ovar(Portugal)

6月20日：Centro de Artes e do Espetaculo de Sever do Vouga(Portugal)

6月22日：エルメート・パスコアル73回目の誕生日

6月26日：Festival de Jazz de Verona(Italia)

2.1. エルメートのお気に入りのおセリフ “エレベーターに小鳥が??”

エルメートの茶目っ気たっぷりの性格はつとに知られている（彼に会ったことがない人でも彼の音楽を聴けばその自由奔放な人柄と遊び心満載のエンターテイナーぶりがうかがえよう）。彼とショッピング（ブラジルでは大型ショッピングモールのことをいう）に行けば、とてもおもしろい光景を垣間みることができる。たとえば、最近流行りのブラジルのロックやポップスを聴いたとき、彼は体を揺らして踊り出す。本人は商業重視でいかにもチープな音楽に辟易しているのだが、若干の皮肉も込めながらも実に愛嬌たっぷりに踊るのである。そんな彼の姿にすこぶる微笑ましさを感じる。

また、エレベーターの中でも、そうした光景に出くわす。エルメートとエレベーターに乗る機会があれば、ぜひ耳を澄ませてほしい。必ず小鳥の鳴き声が聞こえるはずだ。それはもちろんエルメートが作り出す音である。彼が以前メキシコにコンサートに行ったときに購入した時計は12つの時刻を指すところにそれぞれ小鳥が描かれていて、一時間毎におのおのが鳴き出すのである。もちろん好きな時にボタンを押しさえすれば小鳥の音を出すことができる。エルメートはエレベーターに人が入ったことを確認すると、時計の横に

ついたボタンを押すのである。そして「Passarinho no elevador?? (エレベーターに小鳥がいるのかい??)」と尋ねるのである。これは日本のドッキリ番組さながらの光景である。そして、老若男女かまわず不思議な顔であたりを見回し出し、最後にエルメートの遊び心に気づき、笑顔でエレベーターを出ていくのである。時には何かわからず怪訝そうに出ていく者もいるが、エルメートの茶目っ気たっぷりの人間性をうかがい知ることのできる楽しいひとこまである。もう一度、繰り返そう。もしエルメートとエレベーターをご一緒する機会があれば、ぜひ耳を澄ませていただきたい。そしてエルメートに「Passarinho no elevador? (エレベーターに小鳥が??)」と、彼より先に尋ねていただきたい。

2 2. エルメートと映画に行った時の話

エルメートは時折、奥様のアリーニとのデートに映画館に行くようだ。私は以前に二度エルメートご夫妻と映画を観に行ったことがある。ブラジルの映画館は大型ショッピングセンターに隣接していることが多い。そのため、映画に行く前にレストラン街で腹ごしらえをしてから行くのが常なようである。彼らと観た映画のタイトルは忘れてしまったが、一本はベートーベンの生き様と彼を支えた女性の話。ブラジルのベートーベンとも称されるエルメートも本家本元のベートーベンの映画を大変気に入ったようだった。二本目に観た映画は夫妻と私と三人で時間があつたので何の気なしに入った映画（今は名前もストーリーさえも覚えていない）が非常に退屈であったこと。私は日本からブラジルに着いて間もなかったことによる旅の疲れと、腹ごしらえでご夫妻といったレストランでワインをたくさんいただいたこと、それに映画の内容の退屈さも加わって途中で深い眠りに入ってしまった。ご夫妻にとってもすこぶる退屈な映画であったようで、私が途中目覚めてからほどなく「ミチ（私のあだ名）、この映画はあまりに退屈だ。もう出よう！」と言って三人で映画館を出た。奥様のアリーニも「今まで見た中で最低の映画だったわ」と苦笑いしており、翌日にはエルメートの娘さんのフラヴィアにも電話でその映画の退屈さを伝えるほどであった。エルメートはその内容を、なんと「ミチが眠ってしまうほど退屈な映画～」と歌いながら、しばらく話のネタにするほどだった。

2 3. 絵本で語り継がれる偉大なエルメートの軌跡「O Menino Sinho (シニョー少年)」

“ラゴア・ダ・カノーアでは太陽の日差しはいつも強烈であった”この一節から始まる絵本。実は2007年に Editora Atica より文 EDMIRIAM MODOLO VILLACA、挿絵 ROSINHA CAMPOS によって出版された子供向けのエルメートの生き様と音楽を綴ったものである。

Sinho (シニョー) というあだ名で呼ばれていた生まれ故郷ラゴア・ダ・カノーアでの少年時代から兄ゼー (ジョゼー)・ネットとの兄弟での演奏、盟友シヴーカやエラルド・ド・

モンチとの出会い（エラルドのグループに誘われてピアノを始めた逸話も書かれている）、北東部での音楽活動からリオやサンパウロへの進出、そして国際的な活躍を経て現在にいたるまでが、カラフルなイラストと共に楽しく描かれている。これは作者 EDMIRIAM 氏の7年間に渡る調査や取材の賜物といえよう。本の最初には、生まれ故郷の写真や、隣で兄ゼー（ジョゼー）・ネットがパンデイロを演奏し、女の子たちに囲まれながら中央でアコーディオンを演奏する14歳のエルメートの貴重な写真のほか、エルメートの尊敬するゼリア・ガイア女史の写真と前書きも掲載されている。また、後半には2006年までのエルメートのディスコグラフィーを含む人生の軌跡が年表のかたちで載せられており、資料的価値もすこぶる高い。しかも、子供たちに向けて自家製ビリンバウやヘコヘコといった手製楽器の作り方が載せられていて思わず微笑みがこぼれる内容になっている。

ブラジルでは、ロナウジーニョやロナウドなどのサッカー選手の世界的活躍によって、明日の国際的なサッカー選手を夢見る子供たちがあまた存在するが、この絵本を読んで明日のエルメートを夢見る多くのエルメートチルドレンたちが輩出されることを願ってやまない。

ちなみにこの本はブラジルの全国の大型書店で扱われているようなのでご興味のある方はぜひ手に取っていただきたい。

24. サンパウロ探訪～エルメート所縁の地をたずねて

現在まで三度の来日経験のあるエルメート。もっともっと来日し、そのすばらしい音楽を日本に届けてほしいのであるが、なかなかその機会に巡り合えずやきもきしているのは私だけではないだろう。ブラジル国内においてもエルメートのライブを直に見ることができるのは非常に稀で、ブラジルに旅行して現地で彼の演奏を見ることができたらラッキーではないだろうか。私は今まで三度ブラジルで彼の演奏を体感した。そのライブのすばらしさから、彼のライブがあることがわかれば日本ブラジル間の飛行機代を払ってでも見に行きたいほどだ。せっかく渡伯してもエルメートのライブを見られなかったという方も数多くおられることであろう。そのような方々に私は二つの追加プランを提案させていただきたい。

一つはサンパウロやリオのレコード屋を巡り、昔のエルメートのリーダー作や参加作品を購入することだ。今ではなくなってしまう幻のレーベル **som da gente** からのエルメートの作品も、サンパウロでは比較的容易に見つけることができる。サンパウロのセントロ（中心部）には中古レコード店や **sebo**（古本や中古レコード店）がひしめきあっているので、ぜひコレクションを探しに足を運んでいただきたい。

もう一つはエルメート所縁の地を訪れる計画だ。サンパウロには以前、あまたのナイトクラブが存在していて、夜な夜な数多くのジャズセッションやライブが行われていたそうだった。エルメートもサンパウロに拠点を移し活動していたことがある。中でも訪れていた

きたい二つの教会がある。一つは地下鉄ヘブブリカ駅より歩いて数分のところ（若者たちが集うロックのお店の入ったガレリアの裏側）にある黄色の古びた教会。もう一つはあまり便がよくないのでタクシーで行くことをおすすめするサン・ベント聖堂。この二つの教会の外でかつてコンサートの合間や後に毎晩のようにエルメートが楽器の練習をしていたのである。世界的なマルチプレーヤーエルメートの原点がここにあるといっても過言ではない。そんなエルメート所縁の教会を実際に目にしたとき、私はえもいわれぬ感動を覚えたのを覚えている。後者の教会は荘厳かつ見事な建築で、今もミサなどで訪れる方も少なくなく観光がてらにのぞいてみるのもいい。

25. エルメートのファースト録音は？

エルメートの初期の作品（LP）はどれも非常にレアなアイテムとなっており、入手は極めて困難だ。最近では **Sambrasa Trio**（1965年発表）や **Conjunto Som 4**（1965年発表）など過去の名作がCDとなって再発されており、気軽に貴重な音源が聴けるようになったことはうれしい限りだ。以前までエルメートの初めての公式録音は **Walter Santos** の **Caminho** というアルバム（1965年発表）だとか、**Conjunto Som 4** の唯一のアルバム（1965年発表）だと言われてきたが、実際に本人にきいてみると、それらのアルバムが出されるもっと以前（1950年代）にも録音が残されているようである（奥様アーニによると、**Caminho** がリリースされた1965年以前に少なくとも5、6枚の録音がなされている模様である）。

リーダー作ではないが、一番古い録音とされているのが **Clovis Pereira** による **Ritmos Alucinantes** で1956年の録音だ。この当時エルメートは20歳で、北東部の町ヘシーフェを中心にラジオ局などで演奏活動を行っていたようだ。この初めての録音で、エルメートはアコーディオンを演奏し、**Tim Tim Por Tim Tim** と **Adeus, Maria Fulo** の二曲の録音に携わったようだ。私が知る限り、このアルバムが事実上の現存するエルメートの最古のアルバムといってよい。そして、次に古いとされているのが **Tiger** というマイナーレーベルからリリースされた **Batucando no Morro** というアルバムで、**Pernambuco do Pandeiro e seu Regional** によって1958年にリリースされた。このアルバムの全曲にエルメートはアコーディオンを弾いて参加している。このアルバムのジャケットで、弱冠22歳のエルメートがアコーディオンを弾いている姿がとても初々しくさえ見える。

ちなみに、エルメートのピアニストとしての最初の録音は兄ゼー（ジョゼー）・ネット率いる **Jose Neto e Seu Conjunto** による **Boate em Sua Casa-Vol.2** で、1958年にリリースされたようだ。また、フルートを手にしての初めての録音は1964年にリリースされた **Mauricy Moura** による **Roteiro Noturno** で、このアルバムがサンパウロで初めて製作されたエルメートのレコードであったそうだ。

私がエルメートの家を訪れた時に、ご夫妻が所有のLPやCDを見せてくれたことがあ

った。この時ご夫妻は二枚あった後者の貴重なLPを私にくれた。このLPの裏には **Para Aline Morena com Eterno Amor Hermeto Pascoal** (アリーニ・モレーナへ 永遠の愛とともに エルメート・パスコアル) と書かれており、エルメートのファンでもあるアリーニはエルメートに自分が所有していた全てのLPに愛のメッセージを書いてもらっていたことを知った。頂戴する際に、そのような貴重なレコードは頂くわけにはゆきませんと丁寧に断りしたのであるが、「二枚あるから一枚は友人のあなたに」といって笑顔で私にそのレコードをくれた。そんな二人の優しさに感動したのを今も覚えている。従って、このLPは私の大切な宝物である。ともあれ、未だ私も未聴のLPも含めて、エルメートの全作品がCD化されることを切に願う。

2009年5月5日